

熱帯林資源を有効利用するため、廃材の利用と紙などのリサイクルの一層の推進を提唱。○環境に与える影響が少ない伐採搬出の方法に関する調査研究の強化。○特用林産物（NWFP）が熱帯林の持続的な経営と地域住民の経営参加に果たす役割の重要性を認識し、この分野の活動の強化を提唱。

これらを見て分かるように、いずれも重要なことではあるが、目新しさには欠けるといわざるを得ない。その理由は、一つには問題自体の難しさから、これといった新たな解決策が見い出せないということがあるが、もう一つには議論の土台となるペーパーが会議の直前に配布され、じっくり検討する時間がなかったこともあげられよう。

新刊紹介

◎熱帯林のすがた 内村悦三 B6版 172pp. 研成社、東京、1991. 9. 30 刊
¥ 1,300 (税込み)

「地球上のある地域を帯状に占める熱帯圏に存在する自然の姿、とりわけ森林に関する姿を内外から見るのが本書のねらい」だとプロローグに述べられているが、著者が30年にわたって実際に訪ねた熱帯林のいろいろな姿を中心に、関連した話題が添えられた好著である。まず「熱帯林を育てる自然環境」(2章)では、気候・土壌についてこまめに解説し、そのような環境に育つ主要な熱帯林の特徴が述べられる(3章)。もともとタケの専門家である著者は、次の4章で熱帯林の重要な構成植物であるタケ類の特徴を興味深く述べる。5章「緑が映えるラ・セルバ」では、専門家として2年余滞在したコスタリカの森林と、その保全にまつわる試みが紹介される。続く3章(6, 7および8章)では、アフリカのナイジェリア、タンザニアおよびパキスタンの半乾燥地における木質エネルギー依存の実態と、緑の戦略を述べる。ナイジェリアについては、現地というサバンナ(林)の実態を述べ、そこでの植栽候補樹種の解説もつけられている。9章では森林と農業の関わりを取り上げ、両者の組み合わせによる持続的な緑の生産が可能であることを事例をあげて説く。そして、減少しつつある熱帯林をどうすべきかというエピローグでは、天然林の更新方法の改善と、人工林造成の考え方、アグロフォレストリーの役割を強調している。

(浅川)